高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.31

●奈良の夕景。高円山から生駒連山を望む／2005年10月撮影：別役佳代　　書は北見志保子／協力：東大寺長老 筒井寛秀師

リレー随筆㉛ 「出会い」縁を結ぶもの

―― 橋本 嘉子
（旧　藤井 嘉子）

北見志保子没した七十歳を超える年齢になっても、なお志保子心奥に在ったものに深く囚われる私。

女専生だった昭和二十二年、奈良室生寺で「平城山」を歌いに歌った故に、現東大寺長老筒井寛秀師との出会い、志保子自筆の短冊を、友人藤岡達子さんと共に頂戴した事から縁は始まる。短冊のお礼状をお出ししたのであったか、そのお返しに頂いたのが、高知県立文学館にある額装の藤井嘉子宛お便りである。「平城山」の歌を作られた動機と場所を美しい筆でつづられて「平城山を歌い歩きましょう」と。

翌年であったか、「天理（当時丹波市）へお歌の会に招ばれて行くのよ」とお誘いを受け、近鉄電車で天理へ同行させて頂いた。「平城山」の歌を発想された仁徳帝磐媛皇后陵を過ぎるあたりで、皇后が帝を慕い作られた万葉集の歌二首、耳もとでさりげなく詠んで下さった。

秋の田の穂のへに霧らふ　朝霞
　いづへの方に　わが恋ひやまむ

かくばかり　恋ひつつあらずは
　高山の　磐根しまきて
　死なましものを

はっと胸が高鳴り、古歌の人恋うる心が切々と身に迫った。後になって、ご自身の離婚、恋愛をふまえた切実さを知ったが、私はその瞬間、心揺さぶられ、やっと物を見る目が開き人生が始まったと、ひそかに思う事である。

その日、天理の歯医者さん宅で着物に召替えられ、仕上げに前帯をポンとたたき、香水をふりかけられた。「お歌作る事で招んで頂き嬉しいのよ」「私ね、三浦環に似ていると言われるのよ　フフ…」軽妙で楽しい面もおあり。小娘の私は、お手伝いも出来ず、物も言えないで。……東京へ帰られてから、「あれからお帰りが恐くはなかったかとても心配になっていました。女人短歌ができたらお送りしますから、お入り下さいませ」と、〝女人短歌〟結成、準備の年だった。私は中学校に勤めだしていたが、「生徒に鑑賞力をつけるのに、ご自分も歌を作りなさい。これから厳しい批評を本格的にしますよ」と、励まして頂いた。

今思っても恥ずかしいが、東京へ出て勉強したいと言ったらしい。「東京へ来るなら、歌人の中井克比古さんが日が不自由なので付添いの女性を捜しています。お箏なさっているのなら米川文子さん知っていますよ」とおっしゃって頂いたが、生半可な心を見抜いて、「あなたのようなお嬢さんはおやめなさい」と叱られた。「お箏の稽古ばかりでなく、お歌も一生懸命して下さい！」と、いつも歌をと言って頂いたのに。

それから五十年余り。

「平城山は作曲の方がよろしいのよ」。ご自身は謙遜しておられたが、楽曲の美しさもさることながら、自然に調べられた歌詞の美しさは、多くの人をつかまえて離さない。

（箏曲生田流宮城会大師範・大阪府枚方市在住）

高知県立
文学館

◆企画展紹介◆

2005年12月17日(土)～2006年1月29日(日)

「平城山(ならやま)」の歌人 北見志保子 没後50年展

北見志保子(1885～1955)　昭和初期か

高知県の西端、南予愛媛県と接する小都市宿毛。清流松田川畔に程近い地に、北見志保子の生家跡と歌碑があります。

歌碑は亡くなる2年前の昭和28年春に母校宿毛小学校に建てられたもので、彼女の最後の歌集『珊瑚』に収載された「ふるさと」連作の一首「山川よ野よあたたかきふるさとよ声あげて泣かむ長かりしかな」の歌が刻まれています。

優しい「よ」音の響き、それが一転して慟哭へ。そして「長かりしかな」の結句にこめられた志保子生涯の万感の思い。作家浜本浩は、この歌碑に感動し「土佐の女の真情をうたい得て余りあるもの」と語ったそうです。

歌人でもあった夫橋田東声に背き、若い浜忠次郎に心を移したことで、ふるさと人の非難も長年月に及んだとのこと。帰りたくても笑顔で帰れないふるさと―そんな月日も長く続いたことでしょう。

「ふるさと」(三)冒頭には

「拙きわが歌の石ぶみ、生れし町の小学校に建てらる。ひとへにふるさと人のこころあたたかき賜にして、うたた感にたへず。」とその感慨を記しています。

さて、女流歌人といえば、額田王、大伴坂上郎女、和泉式部、式子内親王、小野小町、そして近代の与謝野晶子など多くの名歌人を生んできました。北見志保子も、また近代を代表する女流歌人の一人として、確かな足跡を残しています。しかし、亡くなって50年、知らない世代が殆どになっているのは当然かもしれません。

そんな中で、平井康三郎作曲の「平城山(ならやま)」の歌は今でも演奏会などでよく歌われています。詩(ことば)とメロディーの素晴らしい出会いがもたらした幸運、と言えるかもしれません。

「人恋ふはかなしきものと平城山(ならやま)にもとほりきつつ堪へがたかりき」

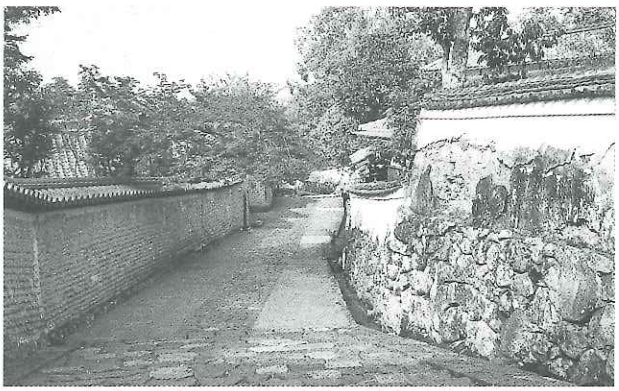
「古(いにし)へもつまに恋ひつつ越えしとふ平城山のみちに涙おとしぬ」

この「平城山」の歌について、国文学者池田亀鑑は、――あの絶唱「平城山」は、万葉の昔から生き、夫人の詩心に宿り、そして永久に女人の心に息づく哀感に違いない。――と絶賛しています。

歌の背景にある「志保子の恋＝大正の恋」にも思いを馳せてください。互いに思いを寄せる人となってしまった、十二歳年下の浜忠次郎(親のはからいでフランスへ留学)とは結ばれる保証のない状況での、夫東声との離別の決断でした。東声もまた彼なりの傷(いた)み苦しみを乗り越え、歌に評論に精進してゆきます。

さて、「北見志保子」の名がいつからか、大正14年の「草の実」創刊からかとも言われてきましたが、今回奈良の筒井家資料を拝見させていただき、大正12年の書簡で「北見志保子」名がすでに使われていたことがわかりました。

この大正期の筒井英俊氏あて志保子書簡は、東京小石川鶯籠町の志保子宅が昭和20年4月の空襲で全焼し、貴重な資料が失われた、という点でも貴重ですが、志保子人生の節目、橋田東声との離別直後の生活・心情を綴っているという点でも白眉の資料です。それらを、本企画展のために快くご提供下さった、東大寺長老筒井寛秀師(英俊氏令息)のご英断に深く感謝申し上げます。



奈良　東大寺三月堂への道。志保子も歩いた道。

また志保子は、「山川朱実」の筆名で小説を書いた時期がありました。昭和初期「女人芸術」や「令女界」、他に作品を書いていますし、明治・大正・昭和と活躍した徳田秋声に師事して、「あらくれ」会同人として室生犀星や野口富士男らとともに、雑誌「あらくれ」にも、よく自己をみつめた小説を発表しています。

古典文学の研究も晩年まで熱心でした。池田亀鑑、武田祐吉、釈迢空らに教えを乞い熱心に耳を傾けています。そこで学んだことを、また自らの歌に活かしていったことでしょう。

「古今和歌集」が成立して一、一〇〇年の今年、「ことばの力」「歌の力」を信じ、三十一文字に籠められた日本人の心の伝統を引き継ぎ、真実に生きた土佐の女流歌人、北見志保子の生涯と文学を、ぜひご鑑賞ください。

(学芸課　別役佳代)

甥の笹田隼男氏と。昭和10年頃か

◆次回企画展紹介◆

2006年2月11日(土・祝)～3月21日(火・祝)

岡田憲佳写真展――万葉の動植物たち

山口在住の岡田憲佳氏は万葉集に登場する動物や植物を数十年にわたって撮影し続けています。四季折々、様々に表情をかえる植物や動物を柔らかなタッチで撮影した写真に、万葉集の歌を添えて、自然とともにあった素朴で優しい万葉の世界を紹介します。

万葉集は、全二〇巻からなり、天皇、貴族から名もない防人まで、様々な身分の人が詠んだ四千五百首以上の歌を集めたもので、七世紀後半から八世紀後半頃にかけて編まれた日本最古の歌集です。

万葉集は高知の先人とも深い関わりがあります。江戸時代の国学者・鹿持雅澄（一七九一～一八五八）は、この万葉集を深く研究し、三十年余りを費やして万葉集の百科事典ともいうべき注釈書『萬葉集古義』を著しました。この大著は生前に刊行されることはありませんでしたが、後年、明治天皇が知ることになり、天皇からの下賜金で一八七九（明治一二）年に刊行されました。『萬葉集古義』の緻密な考証と詳細で独創的な註釈は、後世の研究にも大きく貢献しています。

鹿持雅澄の家は、応仁の乱を避け、都から一条家とともに土佐に来た飛鳥井氏の支流でしたが、雅澄が生まれた頃は既に家運が傾き、生活も厳しい状況でした。京や江戸で学ぶことが望めなかった雅澄は、土佐の学者宮地仲枝から国学を学び、和漢の古典の研究に励みました。

『萬葉集古義』は、一八二三（文政六）年三二歳の時に書き始め、安政（一八五四～一八五九）初年頃に完成しますが、雅澄はその後も推敲を続け、一八五八（安政五）年、六八歳で亡くなります。

万葉集が編纂された頃、仮名がなかったため万葉仮名とよばれる漢字を使った独特の書き方が行われていました。これは漢字の意味とは別に漢字の音訓を利用して言葉を書き記す方法です。現在の私たちにとって万葉仮名はとても読みづらいものです。この万葉仮名を読み解く研究は古くは十世紀中頃から行われ、鹿持雅澄も含め、長年の研究の成果から、私たちは千年以上も前の人々の歌を鑑賞することができるのです。

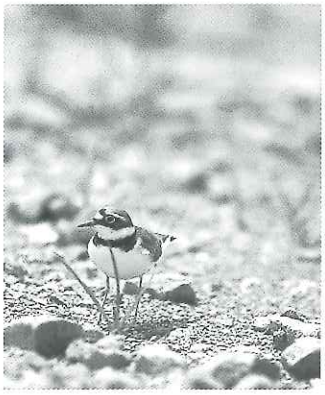
万葉集の歌は、不思議な魅力をもっています。歌の素朴なこころは、万葉の時代に身を置いてみて初めて本当に感じられるのかもしれません。しかし、歌に詠みこまれた植物や動物たちの可憐な姿は、千年の時の隔たりを超越し私たちのそばにあります。

早春のひとときに、美しい写真から万葉の世界に遊んでみませんか。

（学芸課　川島郁子）

展示作品

【ちどり(こちどり)】



淡海の海　夕波千鳥　汝が鳴けば
情もしのに　いにしへ思ほゆ
柿本人麻呂（巻三―二六六）

琵琶湖で夕方の波間に群れ戯れている千鳥たちよ。おまえたちがそんなに鳴くと私の心はしおれてしまうほどに昔のことが偲ばれます。

【うめ】

わが宿に　盛りに咲ける　梅の花
散るべくなりぬ　見む人もがも
大伴旅人（巻五―八五一）

わが家に今満開に咲いている梅の花が、もう散りそうになりました。誰か見てくれる人がいるといいなあ。

【はは(あみがさゆり)】

時時の　花は咲けども　何すれぞ
母とふ花の　咲き出来ずけむ
丈部真麻呂（防人・巻二〇―四三二三）

季節毎の花は色々と咲くけれど、どうして母という花がこれまでに咲いたことがないのでしょうか。

「万葉花」（植物編／動物・風月編）より

学芸員メモ

「なぜ、いまヘッセ?」―日本人とヘッセ― 展覧会を終えて

今回、展覧会を開催するにあたって、一部の皆さまから「なぜ、いまヘッセなの?」というお声をいただきました。「日本におけるドイツの年」の今年、ヘルマン・ヘッセ再考察の機会を得ました事を心より感謝申し上げます。ご存知ない方もいらっしゃるかと思いますが、実は高知とは、意外に関係が深いのです。そこで、まず、日本人とヘッセについてご紹介したいと思います。

ヘルマン・ヘッセと日本人との関係は、明治時代へとさかのぼります。明治時代、石川啄木も参加していた雑誌「スバル」に茅野蕭々(ちのしょうしょう)が「クヌルプ」の一部を「友」という翻訳で掲載したことから始まり、昭和10年代に関泰祐、高橋健二らの訳で 岩波文庫から出された「ペーター・カーメンチント」(郷愁・青春彷徨)「車輪の下」など数編の小説が知られるようになります。戦後は、1946年、ヘッセがノーベル文学賞を受賞したことでさらに幅広い読者層を得ました。また、中学校の国語の教科書に高橋健二訳の「少年の日の思い出」が採用されるなど、今日まで営々と読み継がれています。

さらに、ヘッセの晩年の作品を収めた詩文集「庭仕事の愉しみ」「人は成熟するにつれて若くなる」「地獄は克服できる」などは多くの中高年の方々から共感を得ています。

ヘッセは東西の宗教や思想に通暁し、あらゆる両極的な対立を克服して、そのどちら側からでも見ることができる思想家でもありました。作品「シッダールタ」で、インドの釈迦を取り上げ、東洋の英知にも並々ならぬ関心と理解を示していたヘッセは、中国の詩人李白や杜甫にも唐詩選を通して親しんでいました。

晩年のヘッセ　孫のシビルとともに

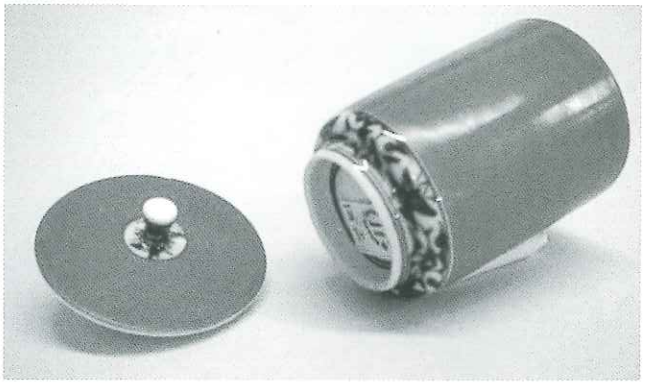
ところで、昭和10年代の日本におけるヘッセ流行の中で、透明で硬質なヘッセ像を形造った人物として、ヨーロッパ文学に広く深い教養を持った高知出身の詩人であり翻訳者でもある片山敏彦を上げることができるでしょう。

彼は、「ヘッセには、益々近いものを見出す。そのうちヘッセ論を是非書きたい。見えざる魂の同族の環が、人類の中にあることを益々感じてくる。…」と『片山敏彦著作集』第九巻　みすず書房に書いています。

そして、ヘッセに関しての論文やエッセイを『心の遍歴』『紫水晶』『詩と文化』『泉のこだま』等に執筆。昭和三十七年には『ヘッセ詩集』をみすず書房から出しています。彼は、その詩集の「序に代えて」で、「われわれの周囲には戦乱の雲が厚く垂れ込めて、愛と理性との宝は埋没していた。それは、暗く悲しい時期であった。そのとき山と海と大陸とを超えて送られたヘッセの詩は本当に「魂の贈りもの」であった。私の心は、深い感謝の思いに充ちた。敬愛する詩人のこの詩から、悩みが醸す虹の光を私は飲んだ。一瞬、絶望と迷妄との雲が裂けて、永遠の青空を垣間見る気持ちがした。」と書いています。この時、ヘッセから送られてきた詩は、「閑な思想」と訳され、詩集に収められました。

片山敏彦　30才の頃

詩人としての片山は、『朝の林』『暁の泉』『片山敏彦詩集』『詩集』(『片山敏彦著作集』第一巻)などの詩集を持っています。魂の深みから発して高い象徴性に至る彼の詩は、神と人間との交感、宇宙的ヴィジョンが盛られ、日本の現代詩の潮流において、尾崎喜八、藤原定などと同じヒューマニズムの詩人として挙げら



ヘッセ愛用の湯のみ（ドイツ国立図書館所蔵）

れると思います。そして、彼は「世代」や「方舟」の同人たち―加藤周一、中村真一郎、原田義人など、或いは法政大学での教え子達―藤原定、長谷川四郎などに大きな影響を与えました。

彼のヘッセの詩の特質に対する理解は、そのまま彼の詩の特質をも説明するものと言えるのではないでしょうか。

残念ながらヘルマン・ヘッセは生前日本に来ることはありませんでした。

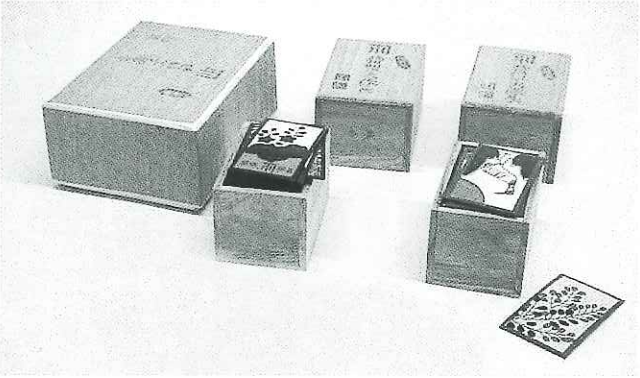
しかし、ヘッセは東洋の文明を理解し、高橋健二、片山敏彦、尾崎喜八といった日本人達と交流しました。そして、これらの人々はヘッセの作品を翻訳し、多くの日本人に伝えました。

今回、スイスの国立図書館から展覧会に出展していただきました蓋付きの湯飲みや花札などは、いずれも日本人の友人から贈られた物であり、湯飲みは普段中国茶や日本茶を飲む時に愛用し、花札は大切に保管されていました。

これまでヘルマン・ヘッセというと日本では詩人として、青春を描く作家として親しまれてきました。しかし、晩年、フォルカー・ミフェルス氏によって編集されたヘッセの作品群は、「死について」「幸せについて」等、真摯に述べられており、文豪ヘッセから「人生とは何か」のメッセージを身近に受け取る事ができます。まだお読みになられてない方は、是非ご一読ください。

展覧会「ヘルマン・ヘッセ展」画家と詩人は、私たちに多くの感動を残し、閉幕しました。

（学芸課　津田加須子）



ヘッセが所蔵していた花札（ドイツ国立図書館所蔵）

指定管理者制への対応

館長　前田英博

平成十七年六月、高知県立文学館の指定管理者は、とりあえず三年間は現在管理委託をしている財団法人高知県文化財団に決まった。しかしながら、三年後には公募により、民間企業と実質的な競争により決定される可能性があり、この間にコスト削減など様々な改善を行うとともに、より専門性を高め公募でも戦える体力をつける必要がある。

この問題に対応していくためには、次のような問題点がある。

まず、これまでは、文学中心に事業が考えられ、「採算性」や「費用対効果」は縁遠い言葉だったが、コスト削減を図るためには、展覧会の企画の選択は勿論のこと、日常業務での看板の製作や消耗品の購入の一つひとつから「採算性」と「費用対効果」を考えながら実施していくことが必要となった。

次に、この新しい流れを理解し、この新しい大きなうねりを乗り切っていける人材の育成である。

これまで、「財団」の基幹職員は県から派遣されてきたが、指定管理者制が導入されるようになった現状では、財団として存続できなくなった場合は県庁に帰れるセーフティーネットを持った職員ではなく、自らの生活が財団の存亡にかかっているプロパー職員が中心となり運営していく組織作りが必要であり、早急な対応が望まれるところである。

万一、指定管理者が民間企業になった場合、これまでの文学館の信頼性や公共性が薄れ、遺族等からの寄託や寄贈が減り、あるいは寄託品の引き揚げが起こり、資料収集等に支障をきたすことなる恐れがある。

そのことは、文学館の設置の可否に直接かかわることとなるので、事務事業の改善を行い、現在の体制で継続できるよう関係者が一丸となって頑張って行きたいと考えている。

詩誌「花粉帯」

『花粉帯』の編集発行人は猪野睦である。彼とぼくは島崎曙海さんの始めた『蘇鉄』の仲間であった。島崎さんの死後、猪野、清水等はその終刊号を出し『塩岩』を創刊した。それも三十四号で終刊した。そして『花粉帯』の創刊に至った。猪野は創刊の弁で「話を書くことで自分と世の中を捉えたい。それを自分の力としたい」と述べた。現代の詩が袋小路にはまって無力化している現状を、少しでも活性化しようという思いで二十数名の同人は結ばれている。『花粉帯』のイメージを猪野は「春先、あるいは秋口に風に花粉がながれ、みずからの条件で受粉し根をおろし、やがて開花し、また花粉を送りだしていく」と書いている。『蘇鉄』が誰にでも発表の場を提供していたように、『花粉帯』は書くことで自分を見詰め直したい人のために門戸を開けて待っている。お互いの向上と詩の底辺を広げるために、会評会や、現代詩講座を行っている。

（清水峯雄）

土佐文学さんぽ 29

吉井勇の韮生の里

―吉井　勇―

猪野　睦

渓鬼荘

吉井勇が韮生峡猪野々にこもったのは二年ばかりの間だった。そのときの歌は歌集「人間経」や「天彦」に収められているが、そこからは吉井勇が近くの集落をめぐり、御在所山を眺めてすごした日々が浮かんでくる。村民にも敬遠されながらも次第に親しまれ、とけこんでいく姿が伝わってくる。

若き伯爵歌人といわれ、「明星」や「スバル」にかいてきた吉井勇が、漂泊の旅ののち破産、夫人のスキャンダル、伯爵位返上、離婚と続いた心の傷をいやしにたどりついたところが猪野々の里だった。

いまその吉井勇の詠んだ歌が一五基、猪野々に散らばり建っていて、吉井勇隠棲の里歌めぐりのマップにもなっている。

その吉井勇が土佐へきたのは昭和六年だった。「われはじめて土佐の国に遊びぬ。海は荒かりしども空あかるく、風光の美そぞろにわれの心を惹くものありき」と「土佐百景」をつくった。いまでも土佐の空の明るさと風光にひかれてくる人は多い。

このあと昭和八年八月伊予を経てふたたび「土佐に入り韮生の山峡猪野々の里に淹留することおよそ三月」と「人間経」の詞書にかくが、これが猪野々ごもりの始まりだった。そのとき香美屋といわれた温泉宿に泊まった。のちの猪野沢温泉である。そして翌年四月にまたやってくる。「われふたたび土佐に入りぬ。山嶮しく海荒しといへども、この地の人ごころ直ぐなることは、げにうるはしき埴安の郷のここちこそすれ」「いでやここにささやかなる廬を結ばめと思ひ定めぬ」と「人間経」詞書にかいている。廬とは仮住まいの粗屋、雨露をしのぐ家、埴安の郷とは安泰の地といったところだったろう。

当時の韮生峡は遠かった。高知市のはりまや橋から大栃行きの乗合、香陽バスに乗り、談議所、神母ノ木、美良布を通り、物部川に沿う峡谷断崖の永瀬で降りる。そこから川底への道を下り鉄鎖渡舟をたぐって対岸へ渡り、そこを上った狭い台地が猪野々だった。高知から二時間近くかかった。むろんダムなどない時代で川上からは伐が流れてくる水量の多い渡場だった。

「昭和九年十一月、土佐の国韮生の山峡猪野々の里に、ひとつの草廬を作りて渓鬼荘と名づけぬ」「何を思ふとてか籠りゐにけむ」と「天彦」詞書にかくが、渓鬼荘はいろりを切った六畳に四畳半をつないだ茅ぶきだった。「天彦」は「寂しければ」「冬夜独座」「爐邊の友」「渓鬼抄」など、ここでの歌を収録している。翌年三月上京、半年近くの渓鬼荘ごもりだった。昭和十二年十月、再婚した孝子夫人と高知市築屋敷での暮らしが始まるが、猪野々は吉井勇の再生の地であった。

それ以降、渓鬼荘へは吉井勇を慕う人、傷心をたずさえた人、さまざまの人がたずねた。先日あらためて猪野々をたずねた。渓鬼荘が昔のまま残り、猪野沢温泉は火災で廃業となったが近くに新しくできた吉井勇記念館があった。

吉井勇を慕った一人に旧制高知高校生木村久夫がいた。昭和十五年から十六年、夏休みになると猪野沢温泉にきた。敗戦後、無実の戦犯にされシンガポールで処刑された。それを悼む学友によって歌碑が建てられた。撰文には「歌人吉井勇に傾倒し旧制高知高等学校時代の青春の日々よく訪れた香北町の勇隠棲の『渓鬼荘』に勇の碑と並んで君の誕生日に歌碑が建立されることとなった」一九九六年四月九日の日付がある。次の歌碑である。

寂しければ御在所山の山桜
咲く日もいとど待たれぬるかな　勇

音もなく我より去りし物なれど
書きて偲びぬ明日といふ字を　久夫

吉井勇も木村久夫と猪野々を偲んで「みなみの露」を書いた。

（詩人）

資料受贈報告

（平成十七年九月～平成十七年十一月）

敬称略

▼**篠崎長文**・「寺田寅彦書簡　篠崎長之宛　葉書六通・封書十三通」▼**松田裕之**・「通信技手の歩いた近代　松田裕之　日本経済評論社」▼**矢野時子**・「（句歌集）茜雲の彼方に　矢野時子著刊」▼**鍋島寿美枝**・「ふたりしずか　山岸雅恵・鍋島寿美枝共著　高知新聞企業」▼**太田紘志**・「ようたヒロシのふれあい時間　太田紘志　リーブル出版」▼**横田晴光**・「序の舞　上・下　宮尾登美子　朝日新聞社」他▼**大森一彦**・「人物書誌大系36 寺田寅彦　大森一彦　日外アソシエーツ」▼**文月奈津**・「（四行連詩集）近づく湧泉　第二集　木島始・田部武光他編　土曜美術社出版」▼**高知こどもの図書館**・「本・こども・NPO―高知こどもの図書館5周年記念―　高知こどもの図書館編刊」▼**橋田昌幸**・「お四国の四季　橋田昌幸　郁朋社」▼**岡林宣子**・「岡林清水　遺品・自筆原稿等文学関係資料」…**岡林清水**（一九二一～一九九八）は国文学者、教育者。大正十年八月高知市北新町（高知市桜井町一丁目）に九敏、千賀於の次男として生まれました。昭和十四（一九三九）年県立城東中学校（追手前高校）から広島文理科大学文学科へ進み昭和十九年卒業。二十二年高知師範学校助教授、二十五年同校教授兼高知大学講師、二十七年高知大学助教授、四十四年同大学教授、六十年定年退官、名誉教授となります。引き続き徳島文理大学文学部教授となり平成四（一九九二）年退職しました。六十年退官後も土佐史談会々長、高知ペンクラブ会長、高知文学学校運営委員長、椋庵文学賞選考委員、高新文芸短篇小説選考委員など多くの役職を務め、後進の指

◆◆◆ 文学館日誌 2005年9月～2005年11月 ◆◆◆

9月

◆10日　黒岩涙香展開幕。（10／16まで）／語りと紙芝居の会。参加者7名。◆11日　展示解説。午前10時～　参加者5名。◆17日　第65回朗読の会。第1部「小野小町論」黒岩涙香・述。第2部「巌窟王」黒岩涙香・訳。高知婦人会館。参加者50名。◆19日　大橋芳子氏来館。◆21日　記念講演会「涙香と孫のイギリス」講師：黒岩徹氏。高知城ホール。参加者210名。◆23日　高知県観光特使名刺1枚（森英俊氏）。来館者3名。◆26日　岡崎高知市長来館。◆27日　愛宕中学校生徒10名、引率者1名観覧。

ビデオ上映会「明治マスコミ戦争　黒岩涙香と宮武外骨」（約42分）土曜、日曜、祝日は午前11時～と午後1時半～の2回上映。

9月ビデオ上映会参加者112名。

10月

◆1日　大橋御夫妻来館。／展示解説。午前10時～　参加者7名。◆2日　高知県観光特使名刺1枚（木村幸比古氏）。来館者4名。◆7日「ヘルマン・ヘッセ展」―画家と詩人―開幕。（11／20まで）／展示解説。午前10時。参加者10名。午後2時。参加者22名。◆8日　語りと紙芝居の会。参加者7名。◆9日　涙香展示解説。16名。◆15日　第66回朗読の会。第1部　唯川恵・作「玻璃の雨降る」。三島由紀夫・作「白鳥」。第2部　宮部みゆき・原作「時雨鬼」参加者35名。◆16日　黒岩涙香展終了。／涙香展示解説。参加者17名。ヘッセ展示解説。参加者、午前6名。午後13名。◆18日　岐阜県神戸町読書サークル様25名観覧。◆22日　展示解説。参加者、午前6名。午後6名。◆29日　記念講演会「ヘルマン・ヘッセと蝶」講師：岡田朝雄氏。参加者53名。◆30日　ドイツ映画上映会「カリガリ博士」（1919年／50分／モノクロ、字幕、サイレント）参加者27名。

ビデオ上映会「明治マスコミ戦争　黒岩涙香と宮武外骨」。

10月ビデオ上映会参加者130名。

11月

◆3日　「ロビーコンサート」M・レーガー無伴奏弦楽作品。二階ロビー。参加者、午前16名。午後44名。／展示解説。参加者12名。◆5日　ドイツ映画上映会「コブラ・ヴェルデ」（1988年／111分／カラー、字幕）参加者22名。◆6日　ドイツ映画上映会「突然裕福になったコンバッハの貧しい人々」（1970年／93分／カラー、字幕）参加者24名。◆13日　展示解説。参加者、午前5名。午後17名。◆19日　第67回朗読の会。『ヘルマン・ヘッセ』第1部　片山敏彦・訳「わが愛する母へ」「東方への巡礼」「魂のおくりもの」「閑な思想」。岡田朝雄・訳「絵をかくよろこび　絵をかく苦労」。第2部　高橋健二・訳「車輪の下」参加者60名。◆20日　「ヘルマン・ヘッセ展」終了。◆27日　第8回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査。出場者23名。記念講演会「アフガニスタン・ぼくの旅と絵本」講師：小林豊氏。表彰式及び講評。参加者126名。

閲覧室から

・収蔵資料の閲覧ができます（貸し出しはできません）。
・資料の複写サービス（有料コピー）も行っていますが、著作権法・図書館法に基づき複写できない場合があります。
・高知の文芸同人誌や、高知出身の作家、高知にかかわりのある代表的な作家の全集や作品を、室内で自由に読むことができます。
・映像コーナーでは、『寅彦と漱石』『土佐の風土と文学』ほか多数のビデオ映像の鑑賞ができます。また、タッチパネル式の「ブックページャーシステム」では、近代・詩歌・現代の高知出身の作家の作品のさわりを読んだり、インタビューを聞くこともできます。
・ご利用は無料ですので、お気軽にお入りください。

＜主な備え付け図書＞

・県内発行誌
・高知県出版文化賞・寺田寅彦記念賞・椋庵文学賞の文教３賞受賞作品
・常設展示室コーナーの作家たちの作品
・寺田寅彦関係
・吉井勇　井伏鱒二　司馬遼太郎など、高知にゆかりのある作家たちの作品
・日本・高知学者関係図書　ほか

【朗読コンクール審査結果（敬称略）】

●金賞＝四万十市立東中筋小学校6年・佐伯奈央
●銀賞（2人）＝高知市立小高坂小学校1年・村山真理子、土佐女子中学校2年・橋本愛梨
●銅賞（5人）＝高知市立昭和小学校3年・宮川理佐、高知市立三里小学校4年・常光美帆、津野町立中央小学校1年・樫村伽弥、田野町立田野小学校2年・中野めい、高知大学教育学部附属中学校2年・大杉絢
●郷土文学賞＝高知県立高知南中学校2年・前田亜由里
●審査員特別賞＝土佐清水市立下ノ加江小学校1年・大西辺留

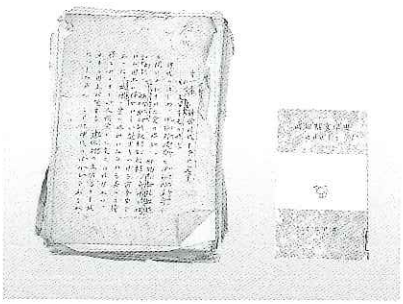
第８回児童生徒文学作品朗読コンクール入賞者のみなさん

導育成、高知県の文化発展の為に力を尽くしました。また、高知県立文学館開設に当たっては構想の段階から検討委員として参画、顧問・専門委員として大きな役割を果たしました。

日本近代文学が専門で、風土文芸、比較文学、国語教育学の分野で研究を進め、特に高知の近・現代文学の研究においては第一人者として数多くの業績を残しています。著書には『土佐近代文学者列伝』（共著）、『高知県文学史』『自由民権運動文学の研究』『土佐風土歴程』『高知県文学散歩』『「一年有半」口語訳』、歌集『浅き流れ』など多数あります。長年の地域に根ざした幅広い文化活動が認められ、五十六年に「高知県文化賞」を受賞しているほか、『高知県文学史』で三十九年度「高知県出版文化賞」、平成七年には勲三等旭日中綬章を受けています。

温和明朗な人柄、長年にわたって積み重ねられた豊かな学殖、巧みな話術による講演は聴衆を魅了し多くの人々から敬愛されました。平成十年八月心筋梗塞により七十七歳で急逝。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。



高知県出版文化賞受賞『高知県文学史』草稿と受賞図書

高知県立文学館ニュース　第三十一号　平成十八年一月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―八二二―〇二三一　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2006年

1～3月

1月――January　2月――February　3月――March

文学館ホール

【平城山（ならやま）】の歌人　北見志保子

没後50年展　Les Poet：Shihoko Kitami

2005年12月17日（土）～2006年1月29日（日）

（※1月2日以降は無休）　観覧料：一般350（280）円

宿毛出身の女流歌人　北見志保子（1885～1955）の没後50年記念の企画展。

「人恋ふはかなしきものと平城山にもとほりきつつ堪へがたかりき」の「平城山（ならやま）」の歌は昭和10年、いの町出身の作曲家平井康三郎（保喜）によって作曲され愛唱されてきました。「愛した奈良との縁や折口信夫・徳田秋声・橋田東声らとの関わりや、未公開書簡や「山川朱実」名での小説原稿や初公開の写真なども紹介し北見志保子の文学と生涯をふりかえります。

関連行事

◇オープン記念：川田弘人「平城山」歌唱

12/17（土）　10:00 am～　　伴奏：西岡利恵

◇北見志保子を偲ぶ「平城山」鑑賞会

1/9（月）　2:00 pm～　於：文学館ホール
要観覧券　解説「北見志保子について」、「平城山」演奏ほか。当日参加可。

◇展示解説：12/17(土)、12/18(日)、1/2(月)、1/9(月)、1/21(土)

10：30 am～、　於：文学館ホール
要観覧券　当日参加可。

＜主な展示資料＞

- 大正11年ごろからの北見志保子の手紙や草稿
- 橋田東声や徳田秋声の自筆資料
- 歌誌「珊瑚礁」「覇王樹」「草の実」「月光」「女人短歌」他
- ふるさと高知の歌人たちの歌集も展示

岡田憲佳写真展 ―― 万葉の動植物たち

会　期：平成18年2月11日（土）～3月21日（火）
　　午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）
休館日：なし
観覧料：一般350(280)円　高校生以下無料
　　※（　）内は20名以上の団体割引料金
主　催：高知県立文学館

山口在住の岡田憲佳氏は万葉集に登場する動物や植物を数十年にわたって撮影し続けています。四季折々、様々に表情をかえる植物や動物を柔らかなタッチで撮影した写真に、万葉集の歌を添えて、自然とともにあった素朴で優しい万葉の世界を紹介します。

関連企画

ギャラリー・レクチャー

写真家・岡田憲佳さんを迎えて、展覧会に出品されている写真の撮影エピソードなどをお話しいただきます。

日　時：平成18年2月11日(土・祝)午後2時～3時
参　加：当日の展覧会観覧券が必要です
申込み：不要　直接会場までお越しください

展示解説

日　時：平成18年2月18日（土）、26日(日)、3月4日(土)、12日(日)
　　各日とも午後2時～3時
参　加：当日の展覧会観覧券が必要です
申込み：不要　直接会場までお越しください

文学館 朗読の会（入場無料）

■第69回　1月21日(土)　午後2時～4時
場所　高知城ホール2階　入場無料　「北見志保子展」関連企画として行います。

■第70回　2月18日(土)　午後2時～4時
場所　高知城ホール2階　入場無料　「須崎朗読の会」のみなさんによる朗読です。

■第71回　3月18日(土)　午後2時～4時
場所　高知城ホール2階　実費　「茶話会」を予定しています。

企画展示室

「新春・茶花香の世界―土佐藩主山内家の名宝展Ⅰ」

1月2日(月)～2月26日(日)　　観覧料：一般400円、高校生以下無料

常設展示室Ⅱ

2006年 新春　「宮尾登美子の世界」展Ⅰ

「宮尾本 平家物語」から「義経」へ ―宮尾文学における華麗なる女性たち

1月7日(土)～2月28日(火)

【休館日】1月――1日　※2月、3月は無休です。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）
休館日	年末年始（12月26日～1月1日）
観覧料	一般350円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔上記参照〕 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県（市）長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

- 高知龍馬空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
〒780-0850

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp　http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/